

「自伝的記憶」研究に求められる視点

佐 藤 浩 一

群馬大学教育学部学校教育講座教育心理学教室

(平成9年9月4日提出)

Some viewpoints for “autobiographical memory” research.

Koichi SATO

Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Gunma University

Maebashi, Gunma, Japan

(Accepted September 4, 1997)

はじめに

「自伝的記憶」とは過去の自己に関わる情報の記憶である。この種の記憶は、精神分析やカウンセリングにおいてクライエントを理解するためのひとつの手がかりとして利用されてきた(三木, 1986; 森岡, 1994)。それが認知心理学の研究テーマとして取り上げられるようになったのは今から20年ほど前のことであるが、その後の研究の進展については Conway (1990), Conway, Rubin, Spinnler, & Wagenaar (1991), Robinson (1992), Rubin (1986), Rubin (1996) 等に詳しい。本稿の目的は、急速に広がり厚みを増しつつある自伝的記憶研究の全体像を描き出すことではない。むしろ「自伝的記憶」研究にとって重要でありながらこれまで十分に考慮されてきたとは言えない視点を指摘し、その視点に立つ研究を紹介しつつ、今後の研究の方向性を探ろうとするものである。

本稿で指摘する視点は、以下の4点である。

- 1) 自伝的記憶の機能を明らかにしなければならない。
- 2) 自伝的記憶と自己、自我同一性との関連を検討しなければならない。
- 3) 自伝的記憶を語る人と聞く人との関係性を考慮しなければならない。
- 4) 自伝的記憶の変動と安定の過程をとらえなければならない。

なお「自伝的記憶」の定義はきわめて難しい。一般には「個人が人生において経験した出来事(エピソード)の記憶」と定義される(Baddeley, 1997; Conway, 1990)。しかし想起された出来事のどこまでが実際に経験された内容でどこからが虚偽記憶(False Memory, Memory Distortion:

Schacter, 1995) なのかという線引きは不可能であろう。また次節以降で論じるが、個人の毎日の経験は個別に見ると些細な出来事の連続に感じられることが多い。しかし、些細な経験の連続が個人の自己を支えているのなら、自伝的記憶のそのような機能をすくい上げる工夫をしなければならない。そのためには個別のエピソードを同じ重みで扱うのではなく、個人にとっての特別なエピソード（重要な意味を与えられているエピソード、個人を動機づけるエピソード、繰り返し想起され語られるエピソード、等々）や、個別のエピソードがつながってスキーマ化・意味記憶化したもの（例「あの頃は幸福だった」「〇〇先生にはお世話になった」）、あるいはいくつかのエピソードがつながって意味づけられ1つのストーリーとなったもの（例「あの時の先生の言葉がきっかけで今の進路を選んだのです」）等を検討することが必要となろう。そこで本稿ではきわめて緩やかに、「自伝的記憶」を「過去の自己に関わる情報の記憶」と定義しておく。こう定義することによって、虚偽記憶も自伝的記憶に含まれることになる。また特定の出来事に関する鮮明なイメージを伴う記憶だけでなく、反復された出来事に基づくセルフ・スキーマ型の記憶も自伝的記憶に含まれることになる（Brewer, 1996 参照）。

1. 自伝的記憶の機能

小説家・山口瞳は、台風の災害にあって失われてしまった家財道具のあれこれを思いながらこう述懐した。

生活というものは、実にクダラナイことで成り立っているということに気づかされる。……たとえばスリッパである。十数年来履きなれていた黒い皮のスリッパは、すっかり足に馴染んでいた。……たとえば貯金箱である。……たとえば爪楊枝である。たとえば大工道具であり植木鉢である。……火難とか水難というのは、こういうものだと思う。生活の襷がなくなってしまうのである。……火事に遭った人は、必ず、アルバムのことを言う。（山口瞳「男性自身・卑怯者の弁」新潮社, 1981, Pp. 54-55）。

日々の生活が些細な事柄から成り立っていることは、大学生を対象に日誌研究を行ったBarclay & DeCooke (1988), Barclay & Subramaniam (1987) の研究からも示唆される。彼らは被験者に毎日3個あるいは5個ずつの出来事を記録し、個々の出来事について8つの尺度上で評定することを求めた。用いられた尺度は「記憶に残りそうな(memorable)－すぐに忘れてしまいそうな(easily forgotten)」, 「他の出来事と似ていない(not similar)－似ている(similar)」, 「不満な(unfulfilling)－満足な(satisfactory)」, 「意味のある(significant)－重要でない(irrelevant)」, 「興奮する(exciting)－退屈な(boring)」, 「ユニークな(unique)－日常茶飯の(routine)」, 「滅多にない(infrequently)－しばしばある(frequently)」, 「驚くべき(surprising)－予想していた(expected)」であった。被験者は7件法で評定を行ったのだが、評定値は4前後に集中していた。すなわち、その日に経験した中では目立った出来事といえども、たいして重要でもなければ記憶に残りそうもないと判断されたのである。被験者の多くは実験に参加するまでは自分の人生

は本当に面白いと感じていたが、実際に評定を行ってみてその結果に驚いたという。

このように些細な出来事であっても、記憶に残しておけば役に立つこともある。このことを示しているのが、近年の思考研究で取り上げられている「事例に基づく推論 (Case Based Reasoning: CBR)」と呼ばれる推論方略である。これは一般的なルールに基づいて問題解決を試みるのではなく、過去の類似の出来事を想起して「あの時はこうだったから、今度も(は)こう対処しよう」とする問題解決方略である。Kolodner(1992) には、様々な嗜好の客を夕食に招待しようとしている人が、以前の類似の状況でいかにして菜食主義者を満足させたか思い出しながら献立を考えるという例が紹介されている。CBRは、一から考えるよりも手っ取り早い解答を我々に与え、前回の過ちを避けることを可能にしてくれるのである。CBRそのものは人工知能の形での具体化が目指されているが(波多野・三宅, 1996)、この発想を自伝的記憶研究に取り入れることは、記憶の機能を明らかにするために有効であろう。その第一歩として、自伝的記憶を意図的あるいは無意図的に想起したことが問題解決を導いた事例を収集するという研究が考えられる。

時には人は全く新しい環境で生きていくことを余儀なくされる。その様な状況では「初めて」の経験を覚えておき、その記憶を参照しながら次の行動を方向づけていかなければならない。

Pillemer は大学生と卒業後 2-22年の卒業生を対象に学生生活の思い出を収集し、1 年次の入学直後の出来事が特に多く想起されることを見出した。これらの出来事は強い感情を伴っていたが、その反面、これまで一度も人に話したことの無い内容も多く含まれていた。このように移行期の記憶が想起されやすい理由として Pillemer は、この時期の記憶が特殊な機能を持っていたからではないかと解釈している。すなわち、新入生にとって大学とは全く新しい環境であり、物事がどのように流れていくのかというスクリプトが未だに形成されていない。そのため新入生はこの時期のエピソードに特に注意を払い、個々の出来事の記憶は、新しい環境でどのように行動すべきかという行動の指針としての機能を果たすのである。ところが次第に環境に慣れてくるとスクリプトにそった行動が可能になり、個々の出来事を鮮明に記憶しておく必要性が弱まる。つまり移行期の記憶は、スクリプトが出来るまでのあいだ行動を方向づけるために繰り返し参照され、その結果、後々までも鮮明に想起されることになるのである (Pillemer, Goldsmith, Panther, & White, 1998; Pillemer, Rhinehart, & White, 1986)。移行期の記憶が想起されやすい理由として、1) 強い感情を伴っていた、2) 「初めて」の出来事は示差性が高く後の経験からの干渉を受けにくかった、という解釈も可能だが、Pillemer の説明はこれらと決して矛盾するものではない。その記憶がどのような機能を担っているのかという視点からの解釈なのである。

Pillemer はまた、17-25歳の女子学生が初潮を経験したときの記憶を検討した。その結果多くの学生が、いつどこで何をしていた時に初潮を迎えたか、その時どんな気持ちがしたかといったことに関して、詳細に想起できることが明らかになった。この記憶も移行期の記憶として、スクリプトが出来るまでの間、彼女たちの行動を方向づける機能を果たしていたと解釈できる。さらに初潮に対する当時の準備状態・予備知識と記憶との関連を検討したところ、予備知識の少な

った女性ほど初潮経験を詳細に想起するという傾向が見出された。十分に準備していた女性の場合、既にある程度スクリプトが形成されていたと考えられる。初潮経験の記憶は、突然初潮を迎えた女性にとって、より重要な方向づけ機能を果たしたのであろう (Pillemer, Koff, Rhinehart, & Rierdan, 1987)。

Pillemer はさらに、大学生が在学中に経験した出来事の自伝的記憶が、その後の行動や意志決定に影響したケースを多数収集している (Pillemer, Picariello, Law, & Reichman, 1996)。次にあげるのは、その一例である。

初めてシェークスピアの授業に出席したことがもっとも影響のあった経験の1つです。それがその後の人生(大学院でエリザベス朝文学を専攻し博士号を取得)の出発点になったのです。……2年次前期に開講されたそのクラスの最初の日のことを一番よく覚えています。私は教授の知識量、シェークスピア作品のあれこれをいとも気楽に語る様子が魅せられました。彼は何でも知っているように見えました。事実、授業の後でフェンシングについて“Keep up your bright swords, for the dew will rust them”という一節を知っているかと思って尋ねると、たちどころに『オセロ、第1幕、第2場、ではなかったかね』との答えが返ってきました。まさにその通りなのです。私は文学をもっと知りたいと思いました。で、今でもそうしているのです。

(Pillemer et al., 1996, p.330).

Pillemer et al (1996)と同じ発想に基づく研究として、速水・陳(1993)は大学生と成人(27-45歳)を対象に、「思い出すことが活動の原動力になり生活の励みになるような『感動体験』」を収集し分析を試みている。その結果、ほとんどの人がこの様な動機づけ機能を有する記憶を持っていることが示された。またその内容としては「成功したり他者から認められた」「苦しさを乗り越えた」「友人知人と一緒に何かに取り組んだ」など、他者よりも自分の行動に関わる記憶が多かった。

佐藤(1997a)は教員養成系大学の学生を対象に、小学校入学から高校卒業までの教師にまつわる思い出を想起してもらい、教職志望意識の強さとの関連を検討した。その結果、教職志望意識の強い学生では中学での教師にまつわる快記憶が多く、教職志望意識の弱い学生ではこの時期の不快な記憶が多いという傾向が見られた。この結果に対して1)中学時の教師に対する快記憶が彼らを教職志望へと動機づけた、2)教職志望が強いために快記憶を選択的に想起したという2通りの解釈が可能だが、志望による明らかな差異が見られたのは中学だけであったことから、1)の解釈の方がより妥当ではないかと考えられる。また報告内容を分析したところ、記憶内容と進路選択の間に密接な関連のあることが示唆された。教職志望意識の強い学生33名中11名で、想起された出来事に対して「その事がきっかけで自分も先生になりたいと思った」「こんな人になりたいと思った」という意味づけが認められたのである。下にあげるのはその例である。

小5の時、人前で話したりするのは苦手ではなかったが、自ら進んで行動を起こせなかった私の胸の内を理解してくれて、当時苦手でチャレンジすることから逃げていた鉄棒をできるようにまで教えてくれいろんな

話をしてくれた。クラス40人のうちの1人にすぎないのに、一人一人の子供の内面まで理解してくれたため、私もこういう先生になりたいと思った。

中2の時、授業中に自分が書いた童話を、国語の先生が印刷して全クラスに配ってくれた。最初は恥ずかしくてちょっといやだったけれども、誉められて嬉しかった。その時初めて自分はもしかしたら国語が得意かもしれないと思うようになり、自信がついた。国語の先生になろうと思うきっかけとなった。

これとは逆に、教職志望の低い学生10名のうち4名が、その出来事に対して「自分は教師になりたくないと思った」「こんな人にはなりたくないと思った」という意味づけを行っていた。

小5の担任が新任の先生でよく泣いた。静かにしてほしい時にみんながふざけていると、怒りだして、そのうちに泣いてしまう。あまりに先生が辛そうなので、自分はこうなりたくないと思った。

中3のとき直接どの教師というのはわからないが、ある教師が私の成績をPTA役員にばらした。それを親から聞いた同級生に嫌みを言われた。人のプライバシーをばらすなんて最低だと思う。教師に対する不信任（小中高一貫して）を抱いた。このことが進路決定にも影響を与えていると思う。教採に受かって結局企業就職を希望した。

ここでは記憶が動機づけ機能を有することが示されたが、彼らの志望が変化した時に教師の姿がどのように想起され、その思い出がどのように意味づけられるかは、現段階では不明である。おそらく、記憶が行動や意志決定を方向づけ、かつ、行動や意志決定が記憶の想起や意味づけに影響するという双方向的な影響があるのだろう。そうであれば、志望の変化に伴い想起内容や意味づけも変化することが予測される。この点は今後検討すべき興味深い課題である。また上で示された意味づけも、決してその出来事を経験した時にその通りに感じたという保証はない。繰り返し想起される過程で、次第に意味づけが明確になり動機づけ機能を強めていったのであろう。

さて、このように自伝的記憶が行動を調整し動機づけるという視点は、カウンセリングや精神分析では以前から指摘されていた(Pillemer, 1992)。また最近では、クライアントが幼児期に肉親から性的虐待を受けたという記憶を想起し両親を起訴するという「虚偽記憶症候群 (False Memory Syndrome)」が大きな問題となっている(Conway, 1997; 高橋, 1997)。これも自伝的記憶が動機づけ機能を有していることを示す1つの(不幸な)例である。しかし記憶の機能を重視する視点は、従来の認知心理学における自伝的記憶研究には、大きく欠けていたもののように思われる。

自伝的記憶が果たす様々な機能は「高齢者における回想(reminiscence)」というテーマでも検討されてきた(大和, 1989)。高齢者はしばしば昔を懐かしみ過去を回想すると言われているが、これは決して病的な不適応行動ではない。特に「ライフレビュー (life review)」と呼ばれる型の回想は、過去から現在に至る一貫した自我を確認したり、未解決の葛藤を解決し自我統合を導

いたり、自己の新たな面に気づき（忘れていたことを思い出し）自己を再構築する、といった機能を有するとされている（Butler, 1963; Coleman, 1986）。また回想はこの他にも、現実（肉体的・精神的衰え）から「古き良き時代」に逃れることにより自らを慰めたり、自尊心を維持したり、不安を軽減するといった機能を有している。長田・長田(1994)は老年期において「回想の量」と「死について考えたり身近に感じたりすること」の間に有意な正の相関を、「現在に対する満足度」との間に負の相関を見出した。また過去を回想することに対して「重荷から解放してくれる」という効果を感じていることが示された。このことは回想が現在の生活に対する不適応状態への1つの対処法として機能していることを示唆するものである。

また想起した内容を他者に語る時には、回想はさらに新たな機能を担うことになる。高齢者にとっては他者から注目され、自分が確かに存在していたことを記録にとどめ、アイデンティティを確認し、さらに伝統や文化や歴史を次の世代に伝える機会にもなる。Myerhoff (1992)は今世紀初頭にアメリカに移住してきたユダヤ人を対象に、若い世代が彼らの話を聞き取るという形式の「ライフヒストリー・クラス」を実施し、その意義を次のように指摘した。

彼らはホロコーストによって消されてしまった文化・社会の継承者である。年老いて死を目前にし、彼らの後にはその文化を直接経験する人がいないことを知っている。また、世代の断絶ゆえに、彼らの記憶を受け継ぐ人もいない。記憶を担っているという高齢者の意識は、その世代の集合的記憶やコホート意識を強め、その集団に緊急かつもしかすると実現できないかもしれない使命を与えることになる。(Myerhoff, 1992, p.232)。

対象とした高齢者にとって死の予感よりも恐ろしいのは、記憶の重荷をおろす機会がないままに死んでいくという予感であった。彼らのストーリーは完全なものや正確なものである必要はなかった。若い聞き手にとって、経験していないことを理解するのは困難であろう。しかし、1つの歴史、1人の人、1つの文化、1つのストーリーがあったということを覚えておいてもらうだけでも十分なのである。(Myerhoff, 1992, p.241)。

同時に聞き手となった学生にとってこのクラスは、過去の文化や歴史と自分との連続性を確認する機会となった。加えて、学生はこれまで「古い」に直面することが少ないが故に高齢者を遠ざけていたが、そのような態度が克服されたという。

ところで、回想が自己の確認に寄与するのであるなら、それは決して高齢者に特異な現象ではなく、自己の危機や葛藤に直面した時や人生周期 (life course) を通して発達的に移行する前後、あるいは新しい環境に移行する前後などに自然に生起する現象ではなかろうか。長田・長田(1994)の研究では、高齢者や壮年群よりも大学生の方が回想が多いこと、大学生にとって回想は「自分を理解するのに役立つ」ものとして受け止められていることが示されている。Pillemer et al (1996)、速水・陳(1993)、佐藤(1997a)は自伝的記憶が動機づけ機能を有することを見出したが、このような記憶は人生の節々で想起され、その人の自己の確認に利用されたのではなかろうか。そうであるなら、先に紹介した Pillemer et al (1986, 1988)の研究では大学入学直後の出来事の記憶が多いことが指摘されたが、入学の前後にはそれ以前の人生を振り返ることが多く

なると予想される。過去を振り返った時にいつの時代の出来事が最もよく想起されるかという研究はあるが (Conway & Rubin, 1993; Fitzgerald, 1996; 長田, 1990; Rubin, Wetzler, & Nebes, 1986), いつ, あるいはどのような状況で人は自分の過去を振り返るのかという研究はほとんど行われていない。これは次節で論ずる記憶と自己との関係を考える上でも重要な課題である。

2. 自伝的記憶と自己, 自我同一性

自伝的記憶と自己が密接に関連していることは, 記憶の研究者にとっても自己の研究者にとっても暗黙の前提のようである (遠藤, 印刷中)。しかし実際に自伝的記憶がどのような形で自己を支えているのかを明らかにした研究は決して多くない。自己を支える—これは自伝的記憶の機能の中でも最も重要なものではなかろうか。

自己と自伝的記憶の関連を検討した研究には2つの方向がある。1つは, 個人差 (パーソナリティ) 変数と自伝的記憶との関連を検討するというものである。しかし, 記憶と自己の関連が自明視されてきたにも関わらず (あるいはその故にか), 自伝的記憶とパーソナリティとの関連を扱った研究は, 抑鬱傾向との関連を検討したもの (Clark & Teasdale, 1982; Williams & Broadbent, 1986) 以外にはきわめて少ない。例えば, 前節で紹介した移行期の記憶や高齢者の回想研究からも, 自我同一性と自伝的記憶の間に密接なつながりがあることが容易に推測できる。きわめて重要な研究テーマであるが, この問題を扱った研究は非常に少ない。

岡本(1967, 1987) は大学生の自我成熟度を測定した上で, 幼児期から小学生時代と中学生時代から現在までの2期に分けて, 最もうれしかった事と最も悲しかった事の想起を求めた。その結果, 未成熟群ではその場での快・不快に彩られた出来事の記述が多く見られた (例「入試の合格発表を見にゆき, 自分の番号を見つけ飛び上がった」「中学時代, 先生がいやがらせを言った」)。これに対して成熟群では快・不快の結合的経験が多く見られたという (例「いちばん悲しかったのは中学時代父を失ったことであるが, その悲しみの底にあった時, それを心からはげましてくれる友だちがあったこと, それが最大の感激であった」)。また, そうした経験が現在の価値観, 人間観, 進路選択等に影響していると指摘した者も多かった。おそらく, いくつもの出来事を1つのストーリーの形につなげて意味づけることが, 自我の成熟にとって重要な役割を果たしているのであろう。これと似たことは臨床の現場でも指摘されている。例えば分裂病患者においては, ばらばらの出来事をまとめて「物語」として思い出を語ることが自我の再構築に寄与し得るのである (森本・前田, 1989; 妙木, 1988)。またいわゆる「内観療法」(三木, 1986) は, 身近な人との関係を想起する中でクライアントが自己のストーリーを書き直し, 語り直す過程であるとも言えよう。なお付記するならば岡本 (1967) の結果は, 自伝的記憶と感情の関連を検討する際に, 様々な感情を安易に快／不快に2分することにより非常に重要な要素が抜け落ちてしまう危険性を示唆するものでもある。

また同一性との関連を直接検討したものではないが, 速水・陳 (1993) では, 大学生の想起し

た「感動体験」は中学・高校時代の出来事が多かったのに対し、成人（27-45歳）では高校以降と中学以前の体験が多く報告されていた。このことは、青年期から成人期にかけての自己の変化に伴い、過去の出来事に対する意味づけが変化することを示唆している。

植之原（1993）は自伝的記憶と自我同一性地位との関連を検討した。「自我同一性地位」とは Marcia（1966）が自我同一性の達成状況を「危機の有無」と「現在の自己投入の有無」の2面から概念化したものであり4類型に分類される。即ち、危機を経た上で現在ある対象に自己投入している「同一性達成」、危機を経ずに社会通念や両親が支持する対象に自己投入している「早期完了」、自己投入の対象を獲得しようと危機のさなかで努力している「モラトリアム」、そして危機の有無に関わらず自己投入を行っていない「拡散」の4つである。植之原は達成群、拡散群、モラトリアム群の大学生に対して、大学、専攻、将来、影響を受けた人、よいと考える基準、生きていく上で大切なこと、という6項目についての意見（「命題」）を尋ねた上で、そう考えるようになったきっかけの記憶（「事象の記憶」）の報告を求めた。その結果、達成群の報告内容は他の2群に比べて命題との関連が強いこと、しかし特定性（そのきっかけが1度だけの特定の事象である程度）と精緻性（状況や自身の行為・考えの記述の詳しさ）はむしろ低いことが見出された。この結果から達成群が想起し語った事象の記憶は、特定の出来事を検索しているというよりも、同一性達成の過程で繰り返し参照された結果エピソード性が薄れ、現在の考えに統合されたものであることが示唆された。この結果もまた、過去の様々な出来事をつなぎ合わせて抽象化し意味づけることが、自我成熟にとって重要であることを示している。

自我同一性地位と自伝的記憶の想起過程の関連を実験的な手法で検討したのは Neimeyer & Metzler（1994）、Neimeyer & Raeshide（1991）である。彼らの実験は、自我同一性地位を問題解決や意志決定のタイプとしてとらえ直した Berzonsky（1988）の理論に依拠している。Berzonsky によれば、達成群とモラトリアム群は「情報志向」であり、自己や投入対象に関連する情報を積極的に求めて処理しようとし、自己イメージから離れた情報もセルフ・スキーマに積極的に統合しようとするという。早期完了群は「規範志向」であり、既存の信念を維持することを重視し、それを揺るがす危険性のある情報は遮断する。拡散群は「拡散志向」であり、周囲の要求や課題、文脈によって行動を決める。さて Neimeyer & Metzler（1994）の実験では情報志向（達成群とモラトリアム群）、規範志向（早期完了群）、拡散志向（拡散群）の各タイプの被験者に対して性格特性語が呈示され、被験者はその特性語にそった行動を自分が行ったときのことを想起するよう求められた。特性語は、その人の自己イメージに合致するかしらないか、ポジティブかネガティブかという2要因を組み合わせる4種類が用意された。その結果、ネガティブで自己イメージに合わない特性語を呈示した条件（例、自分は「けち」だと思っている人が、自分がけちな振る舞いをしたときのことを想起する）で興味深い結果が見られた。再生数は情報志向タイプで最も多く、ついで拡散志向タイプ、そして規範志向タイプでは最も少なかった。また反応潜時は情報志向タイプで最も短く、規範志向タイプが最も長かった。即ち、達成あるいはモラトリアム群

の被験者は自己イメージに合致しない出来事でも多くかつ速く想起することができたのに対して、早期完了群の被験者では自己イメージに反する出来事の想起が抑制されていたのである。さらに実験の前後で被験者の自己イメージの評定を求めたところ、自己イメージに合致しない特性語にそった行動を想起した被験者では、その方向へのイメージの変化が見られた。ただしこの変化の程度は拡散志向タイプで最も大きく、次いで情報志向タイプ、そして規範志向タイプでは最も小さかったという。規範志向の被験者は自己イメージに反する過去の行動を想起しても、それを自己イメージに組み込もうとはしないことが示唆された。

これまで紹介した研究は自我同一性地位と自伝的記憶の関連を検討したものであるが、自伝的記憶の想起という視点から自我同一性地位の測定を再検討することも可能である。先に述べた様に、同一性地位を判定する際に、個人が危機を経た上で現在ある対象に自己投入していれば「達成」と判定されるが、危機を経ずに何かに自己投入している場合には「早期完了」と判定されることになる。ところで同一性地位を判定する質問紙（加藤，1983）では、危機経験の有無を検討するために以下の項目が設定されている。

- 1) 私はこれまで自分について自主的に重大な決断をしたことがない。
- 2) 私は自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということを、かつて真剣に迷い考えたことがある。
- 3) 私は、親やまわりの人の期待にそった生き方をすることに疑問を感じたことがない。
- 4) 私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある。

ここで気がつくのは、これらの質問に答える時には回答者が自分の過去を振り返って、ここにあげられたような体験をしたかどうか想起しなければならないということである。従ってたとえ危機を経験しても、時間がたつうちにその事を忘れたり、危機の程度を過小評価して想起したり、あるいは以前から終始一貫してその対象に自己投入しているように想起したなら、その人は本来は「達成」であっても「早期完了」と判定されることになってしまう。これは同一性を達成する過程から考えると有り得ない変化である。しかし Marcia (1976) が大学時代に面接調査した対象を6-7年後に再調査したところ、「達成」だった7人のうち依然として「達成」と判定されたのは3人であり、3人が「早期完了」、1人が「早期完了・拡散」と判定されたのである。

では、このように危機を乗り越えたことを忘れてしまったり、自己の一貫性を過大評価したりすることがあるのだろうか。自伝的記憶と自己の関連を検討するもう1つの方向の研究が、この点についてヒントを与えてくれる。どうやら人間は、今現在の自己を支えるのに都合の良い記憶を選択的に想起する傾向があるらしい。この点について社会学者はきわめて雄弁に語っている。

我々自身も自己の人生を解釈し、再解釈し続けている。……記憶それ自体は反復された解釈という行為である。われわれが過去を想い出すとき、何が重要で何が重要でないかという現在の考えによって、過去を再構築する。……少なくともわれわれの意識の内部においては、過去は順応性に富み柔軟性に満ちている。すでに起こった出来事を回想し、再解釈し、説明し直すたびに、過去は絶えず変化してゆく。それゆえ、われわれは物

の見方と同じ数だけの人生を持つわけである。……（地理的、社会的移動に伴って）人がそれまで誇らしげに思っていた出来事は、その人の前史におけるきまりのわるいエピソードとなる。もしそのエピソードが、かくありたいと願っている自我像からあまりにもかけ離れている時には、それを思い出すことすら抑制されるだろう。したがって、その人がクラスの卒業生総代となったあの輝かしい日は、再構築された生活史の中では、それまで重要とは思われなかった日に、すなわち初めて絵を描こうとした日に席をゆずることとなる。……イタリア人街から何とか脱出し、出世して郊外に家を構えた人の目には……十代に夢見た少女は、可愛いがしかし無教養な田舎者に変身してしまう。……ところで、これらの例のいずれをとっても、ほとんどの場合、再解釈というプロセスは部分的にしかなされず、またこのプロセスはせいぜいのところ半ば意識されるにすぎない。人は訂正する必要があるところで過去を訂正し、自己の現在の自己像に統合できるものはそのままのこしておく。（Berger, 1963, 邦訳書, Pp. 84-91, ()内筆者）

Erikson, Erikson, & Kivnick (1986) は多くの夫婦に若い頃から老年期までの縦断的なインタビューを行っているが、30-40歳代に危機を迎えた夫婦の多くが、後になるとそのことを忘れていたという。その頃繰り返し夫への不満を表明したり離婚を訴えていた2人の女性は、老年期を迎えて次のように述べている。

ごく初めの頃から献身的な間柄でした。夫が死ぬ日まで愛し合っていました。（邦訳書, p.118）

私たち夫婦がよく似た考え方をするという事実は、二人を結びつけている強い絆なのです。何をするにもいつも一緒でした。いつも助け合いました。61年間ずっと。（邦訳書, p.119）

いずれのケースでも、彼女たちは過去の危機などすっかり忘れてしまっているように見える。今の状態を基準にして自分と夫との関係を想起し、しかも関係の一貫性を過大評価しているのである。

現在の自己に基づいて過去が再構成されることを実験社会心理学の手法で明らかにしたのが Ross の一連の研究である（Ross, 1989; Ross & Buehler, 1994; Ross & Conway, 1986）。Ross によれば、記憶が曖昧な場合には人は2つの情報源を利用して過去の自分の姿を想起するという。現在の自分の状態と、過去から現在までに自分が変化したかどうかということに関する「暗黙の理論」である。暗黙の理論の1つは過去と現在の一貫性を強調するもので、「1年やそこらでは人間は変化しない」といった内容のものが考えられる。このような理論を誤って適用すると、実際は変化したにもかかわらず、今も昔も変わらぬ自分を思い出すことになってしまう。Ross (1989) はジョギングなどの運動に対する意見をあらかじめ調査した上で、1ヶ月後、被験者に「ジョギングなどの激しい運動は益よりも害が多い」という医師の意見を聞かせた（これによって被験者は激しい運動に対して否定的な意見を持つようになる）。その上で1ヶ月前の自分の意見の再生を求めたところ、彼らは実際よりも否定的な方向にバイアスのかかった意見を再生したのである。すなわち被験者は自分の意見が1ヶ月前と現在では変わっているにもかかわらず、「自分は一貫して激しい運動には否定的だった」という判断を下したことになる。また被験者の再生方略

を調べたところ、73%が「1ヶ月くらいでは意見はそんなに変わっていないと思う」といった暗黙の理論を用いていたことがわかった。

逆に過去と現在の差異を強調する理論も考えられる。Conway & Ross (1984) は学習スキル改善コースを開講し、3週間にわたって授業の聴き方、ノートを取り方、テキストの効率的な読み方等を指導した。その後で参加者に、コース参加前の各自のスキル・レベルを再生するように求めた。すると参加者は実際はスキルが上達しなかったにも関わらず、参加前のスキルを実際よりも低く再生し、コースによってスキルが上達したと評価した。「今はこのレベルだが講習を受ける前はもっとひどかったと思う。講習は効果があったのだ」という訳である。またコース修了の半年後に、コースが行われた学期の成績を再生させたところ、実際よりも過大評価する傾向が見られた。コースに参加しなかった統制群の学生では、このような系統的なバイアスは見られなかった。これらの結果は全て「コースに参加することによって学習スキルが上達したはずである」という暗黙の理論が、現実からずれた想起をもたらしただけを示している。

暗黙の理論には社会的影響を受けて形成されたものも考えられる。McFarland, Ross, & DeCourville (1989) は「生理が始まると痛みを感じ憂鬱になる」という暗黙の理論を強く持っている女性ほど、生理中の状態をより否定的に想起することを示した。また McFarland, Ross, & Giltrow (1992) は、加齢に伴って上昇すると信じられている特性（自尊心、気温への敏感さ、等）について高齢者は若い頃の状態を過小評価し、加齢に伴って低下すると信じられている特性（電話番号や名前の記憶力、活動性、等）については若い頃の状態を過大評価する傾向があることを見出した。Lewinsohn & Rosenbaum (1987) は、いま鬱状態の成人はかつて鬱だったが現在は回復した成人や鬱経験のない成人と比べると、幼児期の親の養育態度をより「拒否的だった（愛してくれなかった、ほめてくれなかった、私の問題を理解してくれなかった、等）」と想起しやすいことを示した。これも「子供の頃に親から拒否されたことが鬱の原因である」という暗黙の理論が、鬱状態の人の想起にバイアスをかけたためと解釈できる。

しかしこの節での論議の最後に、被験者の想起内容が常に不正確で歪んでいるわけではないことを指摘しておきたい。第1に Ross (1989) 自身も認めているが、過去を直接検索することが可能なこともあるし、仮に暗黙の理論を適用したとしても、その理論が妥当なものであれば過去の姿を正しく想起することになる。例えば、ある人の性格特性が数年間変化しておらず、そこに「性格は変わらないものだ」という理論を適用すれば、過去の自分の性格は正しく想起される。従って Ross の研究結果を正確に記述するなら、「想起は正しいこともあるし歪んでいることもある。歪みの方向は、現在の自己と暗黙の理論から説明できる」ということになる。第2に、Ross の研究では過去の自己を想起して被験者に評定させるという手続きを用いている。自由再生であれば「思い出せない」という反応も可能であるが、この方法ではそれが許されないために誤想起が増え「歪み」が強調された可能性もある。

人のある方向に動機づけたり、同世代意識を強めたり、記憶を語って他者を楽しませるのであ

れば、記憶内容が現実とずれていても大きな支障はないかもしれない。しかし、CBR 研究や Pillemer らの研究で指摘されるように、出来事を記憶しておくことにより後の状況に備えることが記憶の重要な機能の1つであるならば、思い出す時点で都合良く変化する記憶は認識機能としてきわめて問題の大きいものと言わざるを得ない。これと同じことが、記憶に及ぼすスキーマの影響に関する論議にも当てはまる。記憶はその人の持っているスキーマにそって変化するとされるが⁵ (Anderson & Pichert, 1978; Bartlett, 1932; Bower, Black, & Turner, 1979; Brewer & Treyens 1981; Sulin & Dooling, 1974), これも「歪み」を強調し過ぎた表現ではなかろうか (Alba & Hasher, 1983)。われわれの持つスキーマは環境との相互交渉を通じて形成されたものであり、環境の中での適応的で効率的な行動を可能にしてくれる。そうであるなら、記憶がスキーマに影響されるとしても、それは同時に、ある程度は外界を正確に反映したものでなければならない。「歪み」と同時に記憶の「妥当性」「信頼性」をもたらす条件を明らかにすることも、今後の重要な課題である。

この節では、自己と自伝的記憶との関連を扱った研究を紹介した。自己を支える記憶は、個別の出来事と言うよりは、それらがつなぎ合わされ1つのストーリーとして意味づけられたものではなかろうか。Rossの「暗黙の理論」は、このストーリーを作る際のプロットを提供しているとも言える。記憶と自己の関連を明らかにするためには、自伝的記憶を「過去に経験した出来事の記憶」に限定するのではなく、このようなストーリー化したものについても検討することが必要である。次節では、人が自分の記憶をストーリーとして語る時に不可欠な、聞き手の存在について論じる。

3. 語り手と聞き手

自伝的記憶を想起するということは、個人が他者に対して自己開示を行うということである。そうであるなら、誰に対して開示するかという、語り手と聞き手との関係が重要な要因になってこよう。このことは中性的な材料を用いた実験では統制済みかあるいは問題にさえならない。しかしカウンセリングや精神分析の場面を考えればわかるように、自伝的記憶を思い出すか、思い出したとして相手に語るか、どのような内容が語られるか、といったことが語り手と聞き手の関係によって変化するのとは明らかである。これは臨床場面に限ったことではない。高齢者の回想を調査した長田・長田・井上(1989)は過去回想が少ない人について、その理由として「話を聞いてわかってくれる人がいない」「話をしたいと思う人がいない」「話してもしょうがない」といった意見を紹介している。思い出すことと語るとは別の問題なのである。

鳥山(1991, 1994)は大学生に祖父母のライフヒストリー(生活史)を聞き取ってくるという課題を課し、「祖母の伝記」「祖父母の伝記」としてまとめている。その中で鳥山は高齢者が我が子ではなく孫を相手に語るということの意義について触れている。即ち、親子では両価的な感情・説教・干渉が入り、鬱陶しさを拭い去ることができない。また話の中にいずれ本人同士が登場せ

ざるを得なくなり、冷静に語り手・聞き手の関係を維持することが難しい。これに対して祖父母と孫なら心情的にかなり淡泊に一定の距離をおいて語ることも可能になる。そして時には親子よりも打算や利害関係のない間柄になることもできるというのである（先に紹介した Myerhoff, 1992も同じ事を指摘している）。また人類学のフィールドワークでライフヒストリーの聞き取りが行われる場合、インタビュー後には再び他人になる聞き手に対しての方が、語り手としては語りやすいという（小林, 1992）。鳥山の指摘も小林の指摘も、語り手と聞き手の間のラポールの適切な水準が生活史の語りにとって重要であることを示している。

語り手と聞き手の関係性を重視する立場として、近年の社会学・人類学では「ライフヒストリーの共同制作論」と呼ばれる視点が注目されている。生活史は決して語り手が一方的に語るものではない。語り手の生活史は、実は語り手と聞き手の共同制作の産物であるという（Langness & Frank, 1981; 小林, 1992, 1993, 1995）。社会学者・人類学者の言葉に耳を傾けてみよう。

テープをトランスクリプトするとよくわかるのだが、ここではこういう聞き方をすればよかった、こちらの方へ話題をもっていけばよかったなどと、聞き手は後から反省することが少なくない。つまり、聞き方をちがえれば異なった「意味構造」が生み出され、語られたものは聞き方に伴って創造されたものではないかという疑問がわく。（桜井, 1992, p. 147）

インタビューとは相互作用である。この相互作用は、聞き手と語り手との対面的なコミュニケーション状況といいかえられる。ライフヒストリーは、この相互作用の場を経て生まれるものである。従ってライフヒストリーを考えることは、語り手と聞き手との相互作用のなかで共同制作される「人生」を考えることになる。

（小林, 1995, p. 46）

ライフヒストリーは伝記や自叙伝とは違って、常に繊細で複雑な共同制作の試みである。このように出来上がった産物－ライフヒストリーそのものが、自らの過去の経験、バイアス、興味、必要、そして動機を含めた二人の個人からの二重のインプットの結果なのである。（Langness & Frank, 1981, 邦訳書, p. 82）

しかしながら「共同制作」と称される過程がどう展開するかを明らかにした研究は少ない。次に紹介する小林（1992, 1995）の研究はその意味で非常に貴重なものと言えよう。小林（1992, 1995）はカナダ移民の女性Aさんに対する3回8時間にわたるインタビューから得られたライフヒストリーを分析し、この女性の語る生活史の内容が3つのタイプの話で構成されていることを明らかにした。それは、1）最初の聞き取りで語られただけの「単一の話」、2）同じ内容が繰り返されるが解釈の変化はない「反復のある話」、3）1つの話題が異なるストーリー、異なる解釈のもとで語られる「ヴァージョンのある話」の3つである。例えば「娘時代は幸せだった」という話は繰り返し語られているが、このような「反復」は、その内容に対するAさんの解釈や意味づけが安定していることを示すものであろう。

共同制作の過程を「ヴァージョンのある話」の展開に見ることが出来る。Aさんの夫は漁師であったが博打をしたために一家は経済的に苦勞した。この話題をめぐる3回のインタビューの

中で次に示す5つのバージョンの展開が認められた。

バージョン1 「カナダに来て苦労ばかりだがその原因は夫の博打だった。」
「長男が夏休みに漁場にアルバイトに行って夫の博打を見た。」

バージョン2 「腕のいい漁師だった」「漁場がおもしろくて博打うつのが好きだから帰りたくない。」

バージョン3 「性格がいい人だったので、博打におはれた。」

バージョン4 「夫の博打がなかったら生活が楽だった。」「子供にうまい物を食べさせることができなかった。」「子供に苦しいのを見せまいと思って一所懸命に働いた。」

バージョン5 「長男に、大きくなってもカードだけは持って遊んでくれると言い聞かせた。」

また「老人ホーム入居の経緯」の話も、2つのバージョンで構成されている。

バージョン1 「住んでいた家の税金が上がったのだが、三男が自分の家と二軒分の税金を負担していたので気の毒だと思った。」「子供にこれ以上世話になりたくない。」

バージョン2 「同居していた次男家族との葛藤の末、家出。」「子供が反対でもホームに入ることにした。」

Aさんの生活史に現れた「バージョンのある話」は「夫の博打」「次男のこと」「老人ホームへの入居」の3つであったが、いずれも「苦労」「恥」「人には言えん」といった言葉で評価される、マイナスの経験に関するものである。ここから小林は、バージョンの展開は聞き手と語り手の間の「親密さ」に依拠していると指摘する。聞き手に支持され共感されていく中で、語り手がマイナスの経験に言及してもよいと思う程度の「親密さ」が形成される。そしてこの親密さを基盤にして、マイナスの経験が様々な表現や解釈で語られ、1つの話題が複数のバージョンで構成される「深さ」のある生活史が出来上がったのである。

個人の生活史は決して、全ての出来事がバラバラに同じ重みで並べられた「年表」形式のものではない。さらりと語られる内容もあれば詳細に語られる内容もある。稀にしか語られない話がある一方で、何度も繰り返し語られ、さらには繰り返されるうちに意味づけが変化するストーリーもある。ライフヒストリー研究が明らかにした自伝的記憶のこのような特性は、過去の出来事を個別に扱う研究方法の限界を示唆するものではなかろうか。小林の研究は、語り手と聞き手の関係性を考慮することの重要性を示すと同時に、自伝的記憶を複数のストーリーのダイナミックな複合として検討することの必要性を示唆するものである。

4. 変動と安定性をとらえる研究を

前節では自伝的記憶が語り手と聞き手の関係によって変動することを指摘した。両者の間の関係性のみならず、自伝的記憶の想起は様々な要因に影響されて変動する。本稿で考察した内容を振り返っても、新たな環境への移行に伴って、あるいは加齢の過程で、あるいは自我成熟の過程で、想起される経験や経験に対する意味づけが変化することは明らかである。と同時に、1つのストーリーとして安定して、個人を動機づけたり、様々な経験を解釈する枠組みを与えてくれる記憶も存在する。あるいは「自己」とはこのように安定した自伝的記憶のことなのかもしれない(齋藤, 1996)。もちろんこの様な記憶も最初から安定していたわけではなかろう。想起のつど微妙な変動を繰り返しながら、やがて1つの安定したストーリーに収斂したものと考えることが出来る。このように考えると自伝的記憶の変動と安定は決して、2次変数として慎重に統制したり除去すべきものではない。むしろここにこそ、自伝的記憶の本質が存在するのではなかろうか。

しかし、自伝的記憶が想起のつど再構成されることを指摘するだけなら話は簡単である。この(心理学者にとっては)常識的な教訓を越えて、どの様な記憶がどの様な条件でどのように変動するのか、あるいは逆にどのような記憶内容は大きく変化することなく安定したストーリーとして繰り返し語られるのか、またどのような過程を経て個別の出来事がつなぎ合わされ安定したストーリーが形成されるのか、個別の出来事やストーリーに対する意味づけを強めたり変えたりする要因は何か、……こうした問題を明らかにすることは今後の自伝的記憶研究に求められる大きな課題である。

佐藤(1997b)は自伝的記憶の想起における変動をとらえる1つの試みとして、大学生を対象に約3ヶ月の間隔を置いて2回、「自分の人生において重要な出来事(自伝を書くとしたらそこに含める出来事)」の想起を求めた。その結果、重要な出来事の想起を求めたにもかかわらず、半数の出来事は別の出来事に入れ替わっていた。そこで反復想起された203の出来事の記述を分析したところ、2回ともほぼ同じ記述がされたケースはそのうちの38%であり、残りは表1にあげる変化を示していた。また個人差が非常に大きく、同じ出来事を繰り返し想起する人とほとんどの内容が入れ替わる人、あるいは快事象を繰り返し想起する人と不快事象を繰り返し想起する人の存在が確認された。ここに示された変動のパターンを1つの測度として、どのような記憶が安定して想起されるのか、個人や状況の変化に伴って想起の安定性がどう影響を受けるのか、といった問題を検討することが可能になろう。またここにあげた精緻化や特定化、再解釈や重点移行といった変動をうながす要因を探ることも重要な課題である。ただしここで収集された自伝的記憶はかなり断片的なものである。今後はより大きな単位の記憶を収集し、その変動と安定性を分析することも必要である。

表1 反復想起された出来事の記述のボタンとその例

反復（77件）：記述の内容、感情ともにほとんど変化がみられない。

- ①兄がバイク事故、重傷、入院。
- ②兄がバイク事故、骨盤骨折。
- ①進路が決定。群大合格。国家公務員Ⅲ種合格。
- ②群大合格。国家公務員（郵政）合格。

精緻化（28件）：出来事や前後の状況の記述が詳細になった。

- ①テニス部でレギュラーを決める時期にテニス肘になり悔しい思いをした。
- ②試合前の大切な時期にテニス肘になり、ラケットも握れず悔しい思いをした。
- ①曾祖母の死。
- ②大好きな曾祖母が94歳で死去。骨を拾って骨壺に入れて泣いた。

簡潔化（41件）：記述が簡潔になった。精緻化の逆のボタン。

- ①両親の離婚。横浜から母方の実家のある群馬へ。母に引き取られた。
- ②両親の離婚。横浜から群馬へ。
- ①受験に失敗。悩んで、親と争ったあげく、志望と異なる学部の群大に入学。
- ②受験で成果が上がらず入学に悩んだ。

特定化（8件）：一般的な記述から特定のエピソードに記述のレベルが移った。

- ①部活の部長になって3年間多くの友人と楽しんだ。
- ②17歳の時に部活の大会で上毛新聞にインタビューされたこと。
- ①ドッジボール・チームに入って大勢で遊ぶことが好きになった。体も強くなった。
- ②12歳の時に健康優良児になった。

一般化（16件）：特定のエピソードから一般的な記述に移った。特定化の逆のボタン。

- ①イギリスで歩いていたら、カメラマンに写真を撮らせてほしいと頼まれた。
- ②1年間イギリスの小学校で学んだ。
- ①中学で生徒会の役員に選ばれた。このころから僕の本性が出てきたような気がする（小学校では暗くておとなしい子）。特に文化祭の企画に加われたのが良かった。
- ②中学入学。この頃からだんだん自分の性格と行動が変わり始める。友人の影響で明るくなった。

重点移行（18件）：同じ出来事だが話の重点が変化した。

- ①親の都合で転校。自分は望んでいなかったのに親に反抗するようになった。
- ②父の都合でどうしても転校しなくてはならなくなった。
- ①骨折して室内で色々な工夫をした。これが原因で今の自分（美術科）があるのかも。
- ②遊んでいて骨折をして、遊び方について叱られた。痛くて夜泣いてもかまってもらえなかった。そのせいかわからないが、夜すぐに寝つけなくなった。

解釈変化（15件）：出来事の意味づけが変化した。

- ①第一志望校に合格。他の高校に進学していたら違った生活が経験できたのでは？
- ②高校進学。
- ①大学入学。自分の将来について深く思い悩み、1年間何をやったか覚えていない。
- ②大学入学。人生に悩み途方に暮れ、現実を見つめ、人間関係を学び大きく成長。苦悩の1年だった。

①②はそれぞれ1つの出来事についての、1回目と2回目の記述を示す。

おわりに

本稿では近年非常な発展を見せつつある「自伝的記憶」研究に対して、4つの視点からの提言を試みた。即ち、1) 記憶の機能を明らかにしなければならない、2) 自己・自我との関わりを明らかにしなければならない、3) 記憶を想起し語る人と聞く人との関係性を重視しなければならない、4) 記憶の変動と安定の過程を明らかにしなければならない、という4点である。またこれら4つの視点に共通する事柄として、個別の出来事のエピソード記憶だけではなく、それらがつながって意味づけられストーリー化した記憶を扱うことの重要性を指摘した。このような視点に立つ研究は現在のところ非常に少ないが、この方面での知見が積み重なって初めて、自伝的記憶研究は生態学的妥当性を獲得するものと思われる。

最後に強調しておきたいのは、ここで紹介した研究の多くが、いわゆる「認知心理学」者によるものではないということである。領域が異なり用語が違うととかく異なる対象を研究していると考えてしまいがちだが、実は「自伝的記憶」という大きな鉱脈の中をそれぞれの道具で掘り進んでいるのではなかろうか。Rubin (1996) や Schacter (1995) を見ると、自伝的記憶が認知という領域を越えて、発達、加齢、感情、パーソナリティ、コミュニケーション、臨床、神経心理などの研究者をも刺激し、さらには、精神医学、社会学、人類学等々、心理学以外の学問分野とも結びつき始めていることが読みとれる。このような現象が起きるのは、「自伝的記憶」がそれだけの重要性と魅力を持っているからに他ならない。多くの領域の「自伝的記憶」研究者が互いに刺激を与えつつ、知見を積み重ね理論を構築して行くことが望まれる。

引用文献

- Alba, J. W., & Hasher, L. 1983 Is memory schematic? *Psychological Bulletin*, **93**, 203-231.
- Anderson, R. C., & Pichert, J. W. 1978 Recall of previously unrecalable information following a shift in perspective. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **17**, 1-12.
- Baddeley, A.D. 1997 Human memory: *Theory and practice. revised edition*. Hove: Psychology Press.
- Barclay, C.R., & DeCooke, P.A. 1988 Ordinary everyday memories: Some of the things of which selves are made. In U.Neisser & E.Winograd(Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to the study of memory*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.91-125.
- Barclay, C. R., & Subramaniam, G. 1987 Autobiographical memories and self-schemata. *Applied Cognitive Psychology*, **1**, 169-182.
- Bartlett, F. C. 1932 *Remembering: A study in experimental and social psychology*. Cambridge: Cambridge University Press. 宇津木保・辻正三(訳) 1983 想起の心理学—実験的社会心理学における一研究 誠信書房
- Berger, P. L. 1963 Invitation to sociology. New York: Doubleday & Company. 水野節夫・村山研一(訳) 1979 社会学への招待 思索社
- Berzonsky, M. D. 1988 Self-theorists, identity status, and social cognition. In D. K. Lapsley & F. C. Power(Eds.), *Self, ego, and identity: Integrative approaches*. New York: Springer-Verlag. Pp.243-262.
- Bower, G. H., Black, J. B., & Turner, T. J. 1979 Scripts in memory for text. *Cognitive Psychology*, **11**, 177-220.

- Brewer, W. F. 1996 What is recollective memory? In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.19-66.
- Brewer, W. F., & Treyens, J. C. 1981 Role of schemata in memory for places. *Cognitive Psychology*, 13, 207-230.
- Butler, R. N. 1963 The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, 26, 65-76.
- Clark, D. M., & Teasdale, J. D. 1982 Diurnal variations in clinical depression and accessibility of memories of positive and negative experiences. *Journal of Abnormal Psychology*, 91, 87-95.
- Cohen, G. 1996 *Memory in the real world*. 2nd.ed. Hove: Psychology Press.
- Coleman, P. G. 1986 *Ageing and reminiscence processes: Social and clinical implications*. Chichester: John Wiley & Sons.
- Conway, M. A. 1990 *Autobiographical memory: An introduction*. Buckingham: Open University Press.
- Conway, M. A.(Ed.) 1997 *Recovered memories and false memories*. Oxford: Oxford University Press.
- Conway, M., & Ross, M. 1984 Getting what you want by revising what you had. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 738-748.
- Conway, M. A., & Rubin, D. 1993 The structure of autobiographical memory. In A.F.Collins, S.E. Gathercole, M. A. Conway & P. E. Morris (Eds.), *Theories of memory*. Hove: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.103-137.
- Conway, M. A., Rubin, D., Spinnler, H., & Wagenaar, W. A. 1991 *Theoretical perspectives on autobiographical memory*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- 遠藤由美 印刷中 自己と記憶 梅本堯夫(編) 認知心理学の最前線 培風館
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. 1986 *Vital involvement in old age*. New York: Norton. 朝長正徳・朝長梨枝子(訳) 1990 老年期一生き生きしたかわりあいー みすず書房
- Fitzgerald, J. M. 1996 Intersecting meanings of reminiscence in adult development and aging. In Rubin, D. C. (Ed.) 1996 *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.360-383.
- 波多野諠余夫・三宅なほみ 1996 社会的認知 市川伸一(編) 認知心理学4思考 東京大学出版会 Pp.205-235.
- 速水敏彦・陳忠貞 1993 動機づけ機能としての自伝的記憶ー感動体験の分析からー 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 40, 89-98.
- 加藤厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 小林多寿子 1992 〈親密さ〉と〈深さ〉ーコミュニケーション論からみたライフヒストリーー 社会学評論, 42, 419-434.
- 小林多寿子 1993 伝記と「人生」の解釈 月刊百科, 371, 8-12.
- 小林多寿子 1995 インタビューからライフヒストリーへ 中野卓・桜井厚(編) ライフヒストリーの社会学 弘文堂 Pp.43-70.
- Kolodner, J. L. 1992 An introduction to case-based reasoning. *Artificial Intelligence Review*, 6, 3-34.
- Langness, L. L., & Frank, G. 1981 *Lives: An anthropological approach to biography*. Chandler & Sharp. 米山俊直・小林多寿子(訳) 1993 ライフヒストリー研究入門ー伝記への人類学的アプローチー ミネルヴァ書房
- Lewinsohn, P. M., & Rosenbaum, M. 1987 Recall of parental behavior by acute depressives, remitted depressives, and nondepressives. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 611-619.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Marcia, J. E. 1976 Identity six years after: A follow-up study. *Journal of Youth & Adolescence*, 5, 145-160.
- McFarland, C., Ross, M., & DeCourville, N. 1989 Women's theories of menstruation and biases in recall of menstrual symptoms. *Journal of Personality and Social Behavior*, 57, 522-531.
- McFarland, C., Ross, M., & Giltrow, M. 1992 Biased recollections in older adults: The role of implicit theories

- of aging. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 837-850.
- 三木善彦 1986 内観法からみた記憶想起の治療的働き 発達, Vol.7, No.28, 35-43.
- 森岡正芳 1994 緊張と物語—聴覚的統合による出来事の変形— 心理学評論, **37**, 494-521.
- 森本修充・前田徳子 1989 「幼い頃の思い出を語ること」の治療的意義—長期入院分裂病者の治療経験から— 精神科治療学, **4**, 1541-1552.
- Myerhoff, B. 1992 *Remembered lives: The work of ritual, storytelling, and growing older*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- 妙木浩之 1988 精神療法の「物語」(上)—精神療法へのミクロ的アプローチ— 上智大学臨床心理研究, **12**, 181-193.
- Neimeyer, G. J., & Metzler, A. E. 1994 Personal identity and autobiographical recall. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.105-135.
- Neimeyer, G. J., & Ramesh, M. B. 1991 Personal memories and personal identity: The impact of ego identity development on autobiographical memory recall. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 562-569.
- 岡本夏木 1967 人格成熟の生育史的研究 坂田一也(編) 青年期の理解 福村出版 Pp.214-220.
- 岡本夏木 1987 つまずきとゆらぎ 岩波講座 教育の方法2 学ぶことと子供の発達 岩波書店Pp.110-144.
- 長田由紀子 1990 老年期の過去回想に関する研究 東京都老人総合研究所心理学部門(報告書)
- 長田由紀子・長田久雄 1994 高齢者の回想と適応に関する研究 発達心理学研究, **5**, 1-10.
- 長田由紀子・長田久雄・井上勝也 1989 老年期の回想に関する研究1—回想の質・量・機能の種類と特徴— 老年社会科学, **11**, 183-201.
- Pillemer, D. B. 1992 Remembering personal circumstances: A functional analysis. In E. Winograd & U. Neisser (Eds.), *Affect and accuracy in recall: studies of "flashbulb" memories*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.236-264.
- Pillemer, D. B., Goldsmith, L. R., Panter, A. T., & White, S. H. 1988 Very long-term memories of the first year in college. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition*, **14**, 709-715.
- Pillemer, D. B., Koff, E., Rhinehart, D., & Rierdan, J. 1987 Flashbulb memories of menarche and adult menstrual distress. *Journal of Adolescence*, **10**, 187-199.
- Pillemer, D. B., Picariello, M. L., Law, A. B., & Reichman, J. S. 1996 Memories of college: The importance of specific educational episodes. In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.318-337.
- Pillemer, D. B., Rhinehart, E. D., & White, S. H. 1986 Memories of life transitions: The first year in college. *Human Learning*, **5**, 109-123.
- Robinson, J. A. 1992 Autobiographical memory. In M. Gruneberg & P. Morris (Eds.), *Aspects of memory. 2nd ed. Vol.1: The practical aspects*. London: Routledge. Pp.223-251.
- Ross, M. 1989 Relation of implicit theories to the construction of personal histories. *Psychological Review*, **96**, 341-357.
- Ross, M., & Buehler, R. 1994 Creative remembering. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.205-235.
- Ross, M., & Conway, M. 1986 Remembering one's own past: The construction of personal histories. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of Motivation and Cognition: Fundamentals of social behavior*. New York: Guilford Press. Pp.122-144.
- Rubin, D. C. (Ed.) 1986 *Autobiographical memory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rubin, D. C. (Ed.) 1996 *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rubin, D. C., Wetzler, S. E., & Nebes, R. D. 1986 Autobiographical memory across the lifespan. In Rubin, D. C. (Ed.) 1986 *Autobiographical memory*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.202-221.

- 齋藤洋典 1996 自伝的記憶：意味空間の形成と検索機構 日本心理学会第60回大会発表論文集, S98.
- 桜井厚 1992 社会学におけるライフヒストリー研究—その手法における特質と問題 ソーシャルワーク研究, 18, 144-149.
- 佐藤浩一(1997a) 思い出の中の教師—教職志望意識との関わり— 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 50
- 佐藤浩一(1997b) 自伝的記憶の反復想起における安定性と変化 日本心理学会第61回大会発表論文集, 774.
- Schacter, D. L. 1995 Memory distortion: History and current status. In D.L.Schacter (Ed.), *Memory distortion: How minds, brains, and societies reconstruct the past*. Cambridge: Harvard University Press. Pp.1-43.
- Schacter, D. L. (Ed.) 1995 *Memory distortion: How minds, brains, and societies reconstruct the past*. Cambridge: Harvard University Press.
- Sulin, R. A., & Dooling, D. J. 1974 Intrusion of a thematic idea in retention of prose. *Journal of Experimental Psychology*, 103, 255-262.
- 高橋雅延 1997 偽りの性的虐待の記憶をめぐって 聖心女子大学論叢, 89, 3-25.
- 鳥山平三(監修) 1991 祖母の伝記 ナカニシヤ出版
- 鳥山平三(監修) 1994 祖父母の伝記 ナカニシヤ出版
- 植之原薫 1993 同一性地位達成過程における『事象の記憶』の働き 発達心理学研究, 4, 154-161.
- Williams, J. M. G., & Broadbent, K. 1986 Autobiographical memory in suicide attempters. *Journal of Abnormal Psychology*, 95, 144-149.
- 大和三重 1989 欧米における回想研究の史的展開 社会老年学, 29, 51-63.

付記 本稿は、日本心理学会第60回大会(1996,9,11)におけるワークショップ「自伝的記憶」において筆者が指定討論者として発言した内容に基づくものである。